

## 学校での動物飼育の適切さが児童の心理的発達に与える影響\*

小学4年時から6年時までの縦断研究

中島由佳（日本学術会議），中川美穂子（全国学校飼育動物獣医師連絡協議会主宰・白梅学園大学大学院）無藤隆（白梅学園大学大学院教授）

「4年生全員で飼育活動を行う学校の4年生」と「飼育委員会活動方式で飼育を行わない4年生」について、飼育体験前の3年生終わり（T1）、体験した4年生終了時（T2）、そしてその1年経過した5年生終わりの時点（T3）で、「学校適応」「他者への温かさ向社会的態度」などを調査比較した。

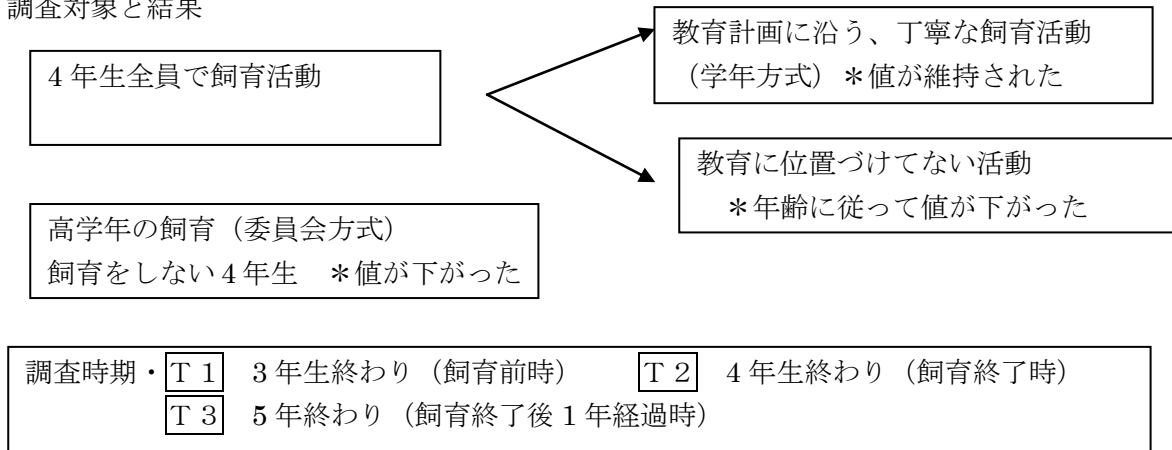
結果、学年飼育群でも「年間計画にそって、1学期飼育導入事業から3学期の下級生への飼育引継ぎ集会など、丁寧に学年飼育を実施した学年方式群」は、「学年不適切飼育群や当該学年児童が直接に飼育に関わらなかった委員会方式群」に比べて、道徳性（他者への温かさ、向社会的態度）や学校適応において明らかに良い影響があった。

さらに、追跡調査の結果、委員会方式（4年は飼育しない）群は、一般に見られるように年齢に従って低下する現象が見られたが、学年方式群の子達は、飼育中に受けた良い影響が向社会的態度（図1）において飼育終了後も続き、ほぼ横ばいで維持していた。学校適応「学校に来るのが楽しい」も同様であった（図2）

このことから、体験を抜きにした道徳教育は効果が薄れることと、丁寧な飼育活動には今求められている道徳的意義が非常に高い傾向があったと言える。また、友人と一緒にいる飼育活動と動物との触れ合いが「友人との関係作り」や「学校が楽しくなる」効果を生むことも明らかにされた。

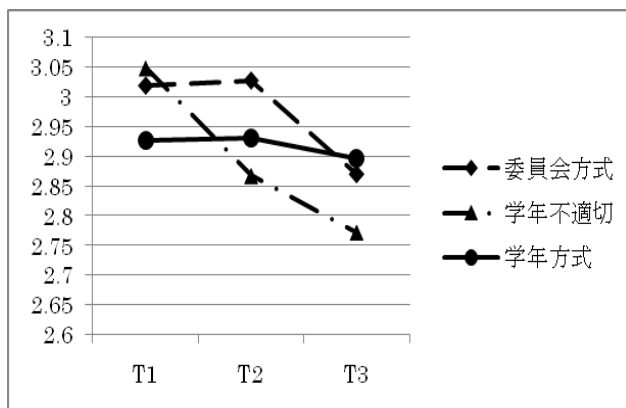
（2009年8月第59回日本理科教育学会にて中島と中川が中間発表）

### 調査対象と結果



調査時期・ T1 3年生終わり（飼育前時） T2 4年生終わり（飼育終了時）  
T3 5年生終わり（飼育終了後1年経過時）

\*図1・各群3時点での向社会的態度の推移



\*図2・各群3時点での学校適応の推移

